

# 漱石の岳父・中根重一の研究 (1)

— 福山藩「誠之館」・官立医学校・東京書籍館 —

橋 川 俊 樹

## (1) 内幸町 — 貴族院書記官長官邸 —

漱石夏目金之助は、明治 28 (1895) 年の 12 月 28 日、のちの日比谷公園裏にあたる内幸町の貴族院書記官長官邸で中根鏡子と見合いをした。彼女の父・重一は、立派な洋館の官舎が与えられる要職にある高級官吏（勅任官）であった。

〈彼は絹<sup>シルクハット</sup>帽にフロックコートで勇ましく官邸の石門を出て行く細君の父の姿を鮮やかに思い浮べた。堅木<sup>かたぎ</sup>を久の字形に切り組んで作ったその玄関の床は、つるつる光って、時よると馴れない健三の足を滑らせた。前に広い芝生を控えた応接間を左へ折れ曲ると、それと接続<sup>つづ</sup>いて長方形の食堂があった。結婚する前健三は其所<sup>そこ</sup>で細君の家族のものと一緒に晩餐の卓に着いた事をいまだに覚えていた。二階には畳が敷いてあった。正月の寒い晩、歌留多<sup>カ ル タ</sup>に招かれた彼は、そのうちの一間で暖<sup>あた</sup>たかい宵を笑い声<sup>うち ふ</sup>の裡に更かした記憶もあった。

西洋館に続いて日本建<sup>にほんだて</sup>も一棟付いていたこの屋敷には、家族の外に五人の下女と二人の書生が住んでいた。職務柄客<sup>がら</sup>の出入<sup>でいり</sup>の多いこの家の用事には、それだけの召仕<sup>めしつかい</sup>が必要かも知れなかったが、もし経済が許さないとすれば、その必要も充たされるはずはなかった。〉  
(『道草』七十二)

夏目鏡子述・松岡譲筆録の『漱石の思い出』(昭和 3 [1928] 年)では、夫人が十九歳のころ住んでいた官邸の様子が次のように語られている。

〈雇<sup>やといにん</sup>人は書生三人、女中三人、抱え俵夫一人の相当の大人数で、官舎は西洋館日本館両方あって、それでも電灯がついたり、当時にはめずらしい電話があったりしていました。(略) 見合いの部屋は父が書斎につかっている洋館二階の二十畳の畳の敷いてある部屋で、ともかくそこにはストーブもとりつけてありました。〉

貴族院書記官長という役職について簡単に説明すると、明治 22 年の大日本帝国憲法制定を受けて、翌 23 年から開かれるようになった二院制の帝国議会のうちの、貴族院における議会運営を円滑に進めるための事務方のトップ、ということだ。現在の議員制度とは違い、貴族院議員は公選ではなく、皇族・公爵・侯爵議員と、互選で選ばれる伯爵・子爵・男爵議員、それに内閣が推薦した官僚・政治家・財界人などから成る勅選議員や多額納税者議員などで構成されている。当時の議事堂はこの官邸のすぐそば（内幸町二丁目）にあり、議会の招集は予算審議のため年末招集が多く、他の招集が年一回くらいで、会期は二、三カ月くらいであった。

中根の、書記官長としての主な職務は議会運営に関する事務ではあるが、それ以上に重要な仕事は貴族院議長・副議長との連絡・相談である。彼らの意向を受けて、貴族院議員はもちろん衆議院、内閣・政府関係者などに説明・調整をしたり、時には議長や副議長の個人的な用向きを勤めることもあった。

漱石が「絹帽にフロックコートで勇ましく官邸の石門を出て行く細君の父の姿」を見たのは、明治 30 年に実父・直克が亡くなり、高等学校の夏休み早々の七月初旬に帰京して、夫婦そろって中根の「官舎に落ちつ」（『思い出』）いた時のことだろう（図 A 参照）。

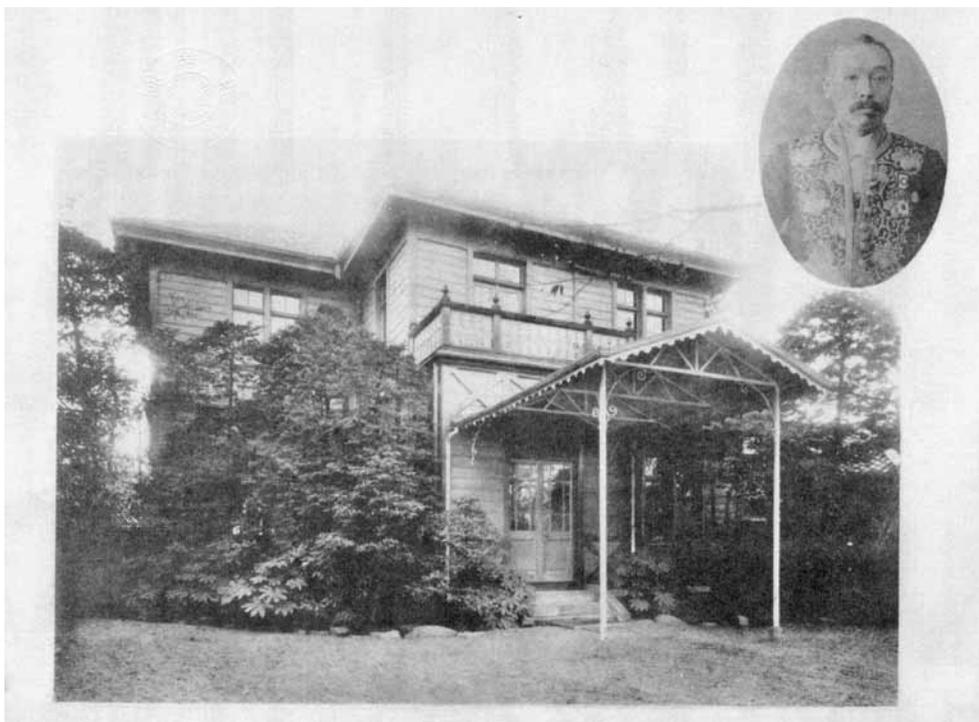


図 A 貴族院書記官長官邸と中根重一（『漱石写真帖』<sup>(1)</sup>より）

中根重一が貴族院書記官長に就任したのは前年の明治27年2月である。年俸は三千円<sup>(2)</sup>。月給にして二百五十円になる。見合い当時の漱石は愛媛県立尋常中学校教師で、月給は八十円。中学教師としては破格の高給取りであったが、その三倍以上の額であった(当時の一円は、現在の八千円くらいの価値であったろう)。漱石は翌29年に松山中学から熊本第五高等学校に転じ、奏任官になって百円に増俸したけれども、それでも二・五倍である。

しかし中根重一は、それだけの年俸では満足していなかったらしい。『道草』では、健三が外国から帰った頃に岳父から、「なに千円位出来ればそれで結構です。それを私に預けて御置きなされると、一年位経つうちには、じき倍にして上げますから」(七十二)と言われる場面がある。また細君(鏡子がモデル)のことに、「相場に手を出したのが悪いんですよ」、「御役人をしている間は相場師の方で儲けさせてくれるんですって」(九十七)とあるので、書記官長時代から(あるいはそれ以前から)相場に手を出していたと考えられる。

中根重一が亡くなったのは明治39(1906)年9月16日(享年五六歳)だったが、その晩年は多額の借金返済に苦しみ、取り立てや執達吏の強制執行などに悩まされていたことは、長男・中根倫(1885年生?)の回想「義兄としての漱石」<sup>(3)</sup>に生々しく描かれている。

〈僕の父が極度に金に窮して、高利貸から強制執行を受けようとした時のことだが、夏目の連印さえあれば、それを猶予すると云はれたので、僕は父に代つて義兄さんの許へ使者に立つた。(中略) 親爺の方は焦眉の急に迫られてゐることではあるし、僕も年が若かったので、ただ使命を果さうといふ一心から、断られるのも構はず、再三押懸けた。或時なぞは明日の朝執達吏が来るといふので、夜晩く出懸けて、午前一時頃から三四時頃まで談じ込んだことがある。〉

中根倫は明治37(1904)年に漱石の援助で岡山六高に進学しているので、この回想は36年3月から37年8月までのことと考えられる。『道草』(1915年6月～9月連載)は、36年1月に漱石がロンドンから帰国し、3月に本郷区千駄木に住んでからの自身と家族、親類などをモデルに書かれているので、まさにこの当時のことである。

〈「今日父が来ました時、外套がなくて寒そうでしたから、貴方の古いのを出して遣りました」

田舎の洋服屋で拵<sup>こしら</sup>えたその二重廻しは、殆んど健三の記憶から消えかかっている位古かった。細君がどうしてまたそれを彼女の父に与えたものか、健三には理解出来なかった。

「あんな汚らしいもの」

彼は不思議というよりもむしろ恥かしい気がした。

「いいえ。喜こんで着て行きました」

「御父<sup>おとつ</sup>さんは外套<sup>も</sup>を有<sup>も</sup>っていないのかい」

「外套<sup>も</sup>どころじゃない、もう何にも有<sup>も</sup>っちゃいないんです」 (『道草』七十二)

『道草』という漱石の自伝的小説を、岳父の「悲境」(七十六)への転落に焦点を当てて読むと、高級官僚にまで登りつめ、更なる富と名声もあと一歩というところでつかみ損ねて転落した、男の人生が見えてくる<sup>(4)</sup>。

この研究では、『道草』で漱石が描いた岳父・中根重一の記述について検証し、さらに娘の鏡子や孫娘の婿に当たる松岡譲も知らなかったであろう、彼の伝記的な事実をできるかぎり調査したうえで、作家としての、また人間としての漱石夏目金之助に対する岳父の影響について考察する。

中根重一に関する基礎資料は、言うまでもなく『漱石の思い出』<sup>(5)</sup>である。鏡子夫人は、父について次のように語っている。

〈私の里の中根家というのは、代々福山藩の侍分だったそうで、祖父は同藩の梁田家(現中外商業新報社長梁田欽次郎さんの家)から入り婿したのです。もともと貧乏<sup>さむらい</sup>士であったところへ御維新でますます微禄したものでありましょう。私が五つ六つのころ、祖父が内職<sup>くつした</sup>に沓下<sup>くつした</sup>をあみ、洋傘の骨などを磨いていたことをおぼろにおぼえております。そういった苦しい中で、父が自力で大学教育をうけることのできようはずはなかったのですが、運よく藩中の秀才として選抜されて、大学へ入ったのだそうです。〉

重一の父親の実家を継いだ梁田欽次郎は、明治8(1875)年8月生れということだから、10年7月生れの従妹・中根鏡子とは二つ違いになる。彼は父親を早くに亡くしたために、働きながら専修学校(のちの専修大学)の夜学に通い、明治27年の卒業後も法学院(のちの中央大学)で勉強し、32年に新聞記者として中外商業新報(のちの日本経済新聞)に入社した。そして、16年後の大正4(1915)年に社長となっている<sup>(6)</sup>。

宮居康太郎『新聞界人物評伝』(昭4)は彼の生い立ちについて、「梁田氏の厳父猛郎氏は備後の福山藩士阿部伯爵の旧臣で江戸詰であつた。梁田氏は明治八年八月十五日父が郷里福山在任中にその長男として生れ、「彼が十一歳に達した時梁田氏の一家は東京に移り住んだ」と書いている。麴町の番町小学校に通ったというから、梁田家が上京した明治18年当時は麴町区平河町に住んでいた中根家とはそう遠くはなかつただろう。

中根重一の生い立ちについては、充実した内容のある資料に乏しい。『増補改訂 漱石研究年表』(昭59)には「広島県深安郡福山町西町士族」とだけある。

項目がある『日本近現代人物履歴事典 第2版』(秦郁彦・編、平25)には、

なかね しげかず  
中根 重一〔広島〕

明治期官僚 嘉永 4. 10. 25—明 39. 9. 16 (1851-1906)

江戸生れ 福山藩下士中根忠治の長男

とある。

そんな中で、比較的長い生い立ちが書かれているのは、大正 9 (1920) 年 5 月発行の『実験眼科雑誌』(第 3 年 17 号) の記事「竹山屯伝 附中根重一伝」である。

〈中根重一ハ備後福山藩中根忠治ノ長子、嘉永四年十月二十五日江戸ノ藩邸ニ生ル。明治維新ノ際帰藩ス。明治四年藩ノ貢進生トシテ上京、医学ヲ志シテ大学南校ニ入ル緒方正規氏等ト同級生タリ。中途退学ス。〉

「明治四年」以降の部分については検証が必要ではあるが、江戸の福山藩邸(明治期の住所では本郷区丸山新町・西片町にあった)に生れて、維新の際に福山に帰ったのは事実らしい。

というのもこの記事には付記があり、それには「中根氏伝資料及写真ハ医学博士入澤達吉、同酒井繁氏ノ好意ニヨルコト多シ」とあるからだ。入澤達吉は、記事のメインである竹山屯たむろの甥にあたり、彼の回想『思出の記』(昭 7)<sup>(7)</sup>によるとかなり親しくしていたので、竹山が院長であった新潟病院兼医学校時代(明治 10~14 年)の中根重一の資料を持っていたのだろうし、中根のことを聞き知っていた可能性も高い。竹山屯は、明治 10 (1877) 年に中根を外国人医師の通訳として新潟病院に招聘した人物である。

また、入澤達吉には父方の叔父に池田謙斎がいて、池田は中根が明治 5 年 11 月に入学した第一大学区医学校の前身・大学東校(7 年、東京医学校に改称、9 年、校地が神田区和泉町から本郷に移転、10 年、東京大学医学部となる)の大助教(明 2~3 年)であった。池田は明治 3 年末から 6 年にドイツ留学、9 年に東京医学校長、10 年には東京大学医学部の初代総理となっている。中根の経歴とはちょうど掛け違っていて親しい関係は無さそうだが、池田の『回顧録』(大正 6 年、入澤達吉編)と入澤の『思出の記』は、中根の過ごした明治初年代の医学校や新潟の具体的なイメージや事実を伝えてくれる貴重な資料である。

その中根重一の修学時代以降に入る前に、彼の父が仕えた備後福山藩(阿部氏)と、重一が生まれた江戸藩邸について見ていこう。

## (2) 西片町・福山西町 — 藩校「誠之館」—

譜代大名・備後福山藩主といえば、ペリー来航時の幕府筆頭老中・阿部正弘(1819-1857)が著名だが、幕府代表としての外交交渉・開明的政策が目立つ正弘の業績の中で、藩のため

の施策としては藩校「誠之館」<sup>せいしつかん</sup>の創設が一番に挙げられるだろう。

福山には以前から四代藩主正倫が設立した藩校「弘道館」(1786年開設)があり、正倫はさらに江戸丸山藩邸にも学問所を設けた(1818年)。七代藩主正弘はそれらを発展・拡大させ、新時代の洋学や兵学も取り入れた文武の〈学校〉に生まれ変わらせた。1854年に丸山藩邸内に「誠之館」を、翌年(安政2年)には福山西町に大規模な「誠之館」を開設した<sup>(8)</sup>。

阿部正弘の学校建設への意欲は強く、藩財政に配慮しながら諸事節儉に努めてでも、関藤藤蔭(石川和介)・江木鱈水らに完成を急がせた。彼はその教育理念を『藩中文武奨励諭示』の中で、〈都て人と生まれたる身は人たる道を尽すべきは当然の儀なれば 文学経義に根拠して平生の心志を定め 武術を講究して不慮に備へ 文武一致に勉励致すべし。〉と表現している。また、江木鱈水が正弘の死後、その意志を永く伝えようと起草した『誠之館之記』は、「学に倦めば」武に入りて、「身体疲労すれば」、「書を読み、黙座静観、以て気力を養ふ。遊び息ふ、終日学に在りて、自然感発、督責を待たずして、文武並び進」む、と書いている<sup>(9)</sup>。

『誠之館百三十年史』(昭63)は、東西両「誠之館」を開設した正弘の教育新構想を三点に絞って説明している。

- ① 教育内容の多様化と実用化。「文」の方では従来の儒学(漢学)・詩文に加え、皇学、さらに洋学・医学・兵学、算法・習字・礼法など実用的な科目を増やした。「武」の方では、旧来の弓・槍・剣・馬術のほかに砲術・柔術・水練などを加えた。
- ② 「誠」の道を志す、高い理念の養成。
- ③ 藩士の子弟の就学義務の徹底と、門閥・身分などに依らず試験成績による登用を原則とする「仕進法」の確立。

「武」の奨励については、創設当時の図面(『誠之館稽古場惣体百歩一絵図面』)を見るとその多様性がよく分かる。真中の校舎を取り囲むように弓・槍・剣・柔術などの道場が複数の流派別に立ち並んでおり、さらに馬術・砲術などの訓練場もある。「文」の座学に疲れたら武術へという流れができていて、無理のない文武両道の修行場になっている。

「誠之館」の名称は、『中庸』の「誠者天之道也、誠之者人之道也」(誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり)から採られている。『それから』(明42)の中で、長井代助の父親が自室に懸けている額の字が「誠者天之道也」である。

〈先代の旧藩主に書いて貰ったとか云って、親爺は尤も珍重している。代助はこの額が甚だ嫌である。第一字が嫌だ。その上文句が気に喰わない。誠は天の道なりの後へ、人の道にあらずと付け加えたい様な心持がする。〉

代助の父・長井得が中根重一をモデルにしているとは思えないが、この額の字については漱石が中根との談話の中で記憶していたものを使用した可能性はある。『道草』に描かれて

いる通り、漱石は岳父と反りが合わず、どちらかというと反感を覚えていた。初めはそうでもなかったのが、留学から帰国後、特に鏡子夫人との離婚問題で決定的に不和となり、中根の葬儀にも漱石は参列しなかった（『思い出』）。

中根重一が「誠之館」に在籍した証拠はない。しかし、「藩士の子弟の就学義務の徹底」がなされていたならば、当然通っていたことだろう。中根は嘉永4（1851）年生れなので、阿部家中屋敷である江戸丸山藩邸の「誠之館」が出来たときには4歳であり、阿部正弘が亡くなった時は7歳だった。明治元年（1868年）に一家が福山へ移転したと仮定すると、18歳まで江戸に居たはずである。当時の就学年齢はまちまちだが、15歳までには入学していただろう。当然、「誠之館」の由来は熟知していたはずで、それを婿に吹聴しても不思議はない。

維新时期を迎えると、福山藩のような譜代大名は幕府側と見なされ（実際は、積極的な「佐幕」派だった藩は少なかった）、特に戊辰戦争以後は、「朝敵」の汚名を受けてでも幕府側に付いて戦うか、官軍側に恭順するかの選択を迫られた。

福山藩は西隣りの安芸広島藩をはさんで長州藩に近く、第一次・二次の「長州征伐」に参戦し、慶応2（1866）年の第二次征討では石州口の戦いで大村益次郎率いる長州軍に完敗し、敗走している。漱石が生まれた慶応3年の11月に九代藩主阿部正方が病没、翌年の1月には山陽道を東へ向かう長州軍に福山城を包囲され、関藤藤蔭らの決断で恭順した。その結果、明治2（1869）年4月、10代藩主阿部正桓（広島藩主浅野長勲の弟）は官軍として北海道・箱館で榎本軍と交戦することになる。

先の資料では中根重一が明治維新の際に帰藩したことしか分からないが、「明治四年藩ノ貢進生トシテ上京」とあるので、備後福山でも藩校に通っていたことは間違いない。ただしそれが「誠之館」ではない可能性もある。というのは、福山藩は明治2年9月に「同仁館」という医学校兼病院を同じく西町に開設しているからだ<sup>(10)</sup>。

江戸「誠之館」での教育の詳細が分からないので、福山誠之館の資料に頼るしかないのだが、それも蘭学や医学についてとなると心もとない。『誠之館百三十年史』には、「幕末における福山藩士の語学学習の詳細は明らかでなく、わずかに佐沢太郎の仏学、小林義直の英学が知られているにすぎない」とある。「同仁館」創設については、「設立にもっとも尽力したのは、誠之館洋学世話取・教授寺地強平であり、これを助けたのが、寺地の弟子五十川基と小林義直」だという。

寺地強平（1809-1875）は、長崎に遊学し、また江戸で坪井信道に師事して、福山で開業した蘭方医である。1843年に阿部正弘の招きに応じて江戸に行き、蘭書を講じている。正弘の死後は福山に戻っていたが、明治2年に「同仁館」の院長兼教授に任命された<sup>(11)</sup>。

小林義直（1844-1905）は農民の出であったが、寺地強平の塾などで頭角を現し、1861年に「誠之館」で学ぶことを許され、1863年に江戸留学を命ぜられた。幕府の開成所・医学所ほかで洋学・医学を学んでいたが、中根と同じく維新時に帰藩し、誠之館の英学教授となっ

ている。明治2年末には幕府の医学所が大学東校となったときに招かれて小助教となり、5年に文部省に出仕して翻訳を担当するが、これについては後述する。

中根は「同仁館」ができた時には福山に居たはずだから、すでに「誠之館」の洋学寮で学んでいたであろうが、転入あるいは両方に通っていた可能性はある。何とんでも中根重一がのちに上京して入った学校が新政府の医学校だったのだから、福山にいる頃に洋学・医学の手ほどきは受けていたと思われる。

当時の福山藩は、明治2年2月に藩主阿部正桓が版籍奉還を願い出て、6月に知藩事となり、8月に帰藩している。それからの、4年7月の廃藩置県による、「誠之館」の廃校（11月）・「同仁館」の廃止（12月）に至るまでの期間は、明治新政府が繰り出す矢継ぎ早の命令や制度変更により全国の藩が翻弄された時期である。またその一方で、近代化に対応するために、各藩が積極的に藩政改革を行っていた時期でもあり、この当時の有名なエピソードに新潟・長岡の『米百俵』がある。

福山藩は廃藩置県後に福山県に、次いで深津県（11月）となった。藩主は知事を解任され、また東京居住を命じられ、知事は官選となった。しかし福山では藩主の上京阻止をねらった大一揆が発生し、阿部正桓は上京延期を政府に上申している。

現在、福山城天守閣は「福山城博物館」になっているが、そこで販売している『廃藩直前福山城下地図』は、消えゆく武家の城下町「福山」の姿を描き残しておこうとしたものであろう（図B参照）。その地図の西門出口すぐの所に「中根瀝」という名が書き込まれている。けれど屋敷の位置や規模から見て、江戸詰めの下士に過ぎなかった中根家ではないであろう。これはもしかすると、『広島県史 近世1』に名が出てくる「中根宗右衛門」の末裔かもしれない<sup>(12)</sup>。ともあれ、次ページ掲載のこの地図（図B）は、中根重一の上京当時の福山を十分に彷彿させてくれる。

明治初年当時の福山藩士の不安定な生活について、風間誠『藩士・風間家の研究：福山藩（江戸定府）藩主譜代大名・阿部公御代御仕え江戸時代から明治時代への変遷』<sup>(13)</sup>では、版籍奉還のころから著者の曾祖父は「従来の藩の仕事から新制度の仕事すなわち、『小学校の教員』や『地域の社会貢献』等に従事」したと述べている。

また土井作治『幕藩制国家の展開：広島藩・福山藩を中心として』<sup>(14)</sup>には、「福山における徒士格以上の役人数の推移」表があり、文久元年（1861年）における福山藩国元の下士は、「坂上番」（38人）・「広間」（88人）・「供番」（45人）・「勘定方」（39人）などの役職に就いていたことが分かる。維新後、そこに江戸詰めの上士が流れ込んできたのだから、その中のひとり、重一の父・中根忠治の立場や生活は苦しいものであったに違いない。

『漱石の思い出』によれば、そんな中で国内留学生として上京できた中根は、「大学」では「経済学を修めたい」と志し、「そのためにドイツ語をやらなければならない。ところがドイツ語をやるためには医科でなければ修められないというので医科に入った」という。

しかし『実験眼科雑誌』には、「明治四年藩ノ貢進生トシテ上京、医学ヲ志シテ大学南校



図 B

二入ル」とあり、目的が違っている。また、医学を志したなら「大学東校」に入りそうなものだが、そこに未だ混沌としていた明治2~4年ころの「大学」の事情が関わっている。

「貢進生」制度は、明治3年7月27日付の「太政官布告」で政府が各藩に、その石高に応じて1~3人の、16歳~20歳の人材を「大学南校」（前・開成所）に差し出すように求めたものである<sup>(15)</sup>。「貢進生」の学費等は政府持ちだった。当時の政府は、欧米化・近代化のために積極的に西洋人を高額で雇い入れ、一方で有望な学生を海外留学生として派遣、「貢進生」ほか多くの人材を育成し、彼らが将来〈お雇い外人〉と入れ替わることを期待していた。

この時、十万石の福山藩の割り当ては2人で、武田安之助と山岡義五郎が選ばれている。貢進生の総数は300余名にのぼり、彼らは10月に大学南校に入学した。当時の南校には正則と変則があったが、「貢進生」はすべて外国人教師中心の正則に入れられ、また全員が寄宿生とされた。クラス編成は主に語学能力別に分けられ、月末の試験で進級することができた。しかし、さまざまな藩から送られてきた学生は玉石混濁で、やめていく者も多かったという。

「大学東校」（前・医学所）の方は、『懐旧九十年』<sup>(16)</sup>によれば、石黒忠憲の提言により「各藩医師の募集」が行われた。「これは甲乙の二ツに区別し、先ず各藩に内示して、甲は有

為の少年を上京入学せしめ、およそ五、六年にして卒業後帰藩させる。乙は現に医職にある者を若干上京入学させ、およそ二カ年で成業帰国させる」ものだった。そして「諸藩から相当の志願者が出て」、明治4年8月のドイツ人教師着任当時には300余名の学生がいたという。

明治3(1870)年の、この時の学生だけが「貢進生」ならば、中根重一は「貢進生」ではない。けれども当時の大学南校への入学は随時受け付け同然で、試験さえ受けて合格すれば入学できたようだから、中根が明治4年になってから「貢進生」と同様の資格で東京留学を果たしたのなら、大学南校のおそらく独語科に入った可能性はある。

そして、医家の生れでもなく「医者」志望でもない中根重一が、明治3年の「医生募集」に応じて大学東校の方へ入った可能性は低い。翌4年8月にずれ込んだドイツ人教師の到着以降の「東校」ならば可能性はあるが、中根は最終的に5年11月から「医学校」の予科一年に入学しているので、それまではドイツ語が学べる学校か塾に通っていたと考えた方が自然であろう。

「中根氏伝」の資料に名前が出てきた、同級生の緒方正規のケースが参考になる。

緒方正規(1853-1919)は、嘉永6年に熊本の漢方医の家に生れ、明治3年に熊本藩がオランダ人医師マンスフェルトを招いて医学校を開いたので入学した。しかし、東京の医学校がドイツ人教師を招聘することを聞きつけ、ドイツ医学を修めるために4年10月、友人たちと上京し、5年2、3月頃とりあえず「南校」を受験して合格した。そして7月に、「東校」に転学したという(山本俊一「緒方正規」、『公衆衛生』vol.45, no.1, 1981年1月)。

野村茂『北里柴三郎と緒方正規』<sup>(17)</sup>によると、緒方は明治5年1月5日から友人と二人で「駿河台のある長屋」を借りて住んだが、毛布一枚しかなく寒くて眠れなかったという。神田錦町にあった「南校」では、ドイツ人教師グレーフェルから教えを受けた。そして7月に「南校」(当時の名称)からの推薦書を持って「東校」を受験し、合格したとしている。

上村直己「緒方正規のドイツ留学とペッテンコーファー宛書簡」<sup>(18)</sup>は、緒方の自伝(といっても小伝)の引用と『南校一覧』(明5)から、南校のドイツ語教育の実態を書いている。

〈余ハ明治五年二、三月頃大学南校ノ試験ヲ受ケテ入学ヲ許可セラル、日々通学シグレーフェン氏ニ就キ独逸語算術其他ノ学課ヲ学ビタルモ元来独逸医学ヲ志望シ上京セルヲ以テ七月ノ休業迄南校ニ通学シ七月ニ至リ東校ニ転学センコトヲ南校ニ願ヒタル〉

〈『南校一覧』に収められた「独四ノ部」の時間割を見ると、授業は月曜日から土曜日まで毎日あるが、午前中だけで終わる。例えば月・水・金曜日は7時より8時まで算術、8時から9時まで単句、9時から9時半まで体操、9時半から10時まで綴字、10時から11時まで読方、11時より12時まで習字となっている。〉

中根が緒方と同じように「南校」でドイツ語を学んでいたなら、以上のような授業を受けた

ことだろう。そして中根の場合は、医学ではなく本式のドイツ語を身につけるために「東校」を受験したのだと思われる。

それにもうひとり、中根が官立医学校に入学するまでにどんな経緯をたどったのか考えるうえで参考になる人物がいる。中根より年下の「誠之館」出身・清水郁太郎である。

清水郁太郎(1857-1885)は、安政4年に福山藩士の子として生れたが、幼くして鍼医の家の養子となった。明治4年に藩費留学生として選ばれて、医学を学ぶために上京<sup>(19)</sup>。司馬凌海の「春風社」でドイツ語を学び、大学南校に入ったのち、5年11月に「第一大学区医学校」の予科2級(二年制予科の最上級)に転入したと思われる。

司馬凌海(1840-1879)は、佐渡ヶ島生まれ。医学や語学を江戸・長崎で松本順やポンペに学び、この当時は極めて珍しいドイツ語の塾を下谷練塀町(神田和泉町のすぐ近く)に開いていた。大学東校=医学校の教授(明3・少助教, 明5・大助教)ともなり、ミュルレルらドイツ人教師の通訳を勤めた。ドイツ語・英語・オランダ語に通じ、語学の天才と目されていた<sup>(20)</sup>。

中根重一がなぜ「経済学」を志し、それにはドイツ語が必要だと考えたのかは不明だが、明治3、4年時点で、東京で本格的にドイツ語の勉強ができたところは、ドイツ人教師を4名雇ったばかりの大学南校と、ドイツ語専門の私塾である司馬凌海の「春風社」くらいしかなかった。もっとも、一学年下の明治6年末に医学校に入学した森鷗外(1862-1922)は、本郷の進文学社でドイツ語を学んでいるし、川俣昭男によれば横浜の高島学校でも学べたようだ<sup>(21)</sup>が、7年度・8年度入学者の頃は、医学校に入るにはドイツ語が必須であることが周知されていたので事情が違う。中根の上京が明治4年ならば、このどちらかでドイツ語を学んでから官立医学校に入った可能性が高いと思われる。

はっきりしていることは中根重一が、ミュルレルの行なった明治5(1872)年秋の本格的な入学試験のあと、「東校」から改称した「第一大学区医学校」予科に入学し、寄宿舎生活を始めていることである。その証拠は、緒方正規の親友でもあった小金井良精の回想にある。

### (3) 神田和泉町：医学校

小金井良精の回想に「中根重一」が登場していることは、彼の孫である(つまり、森鷗外の妹・小金井喜美子の孫でもある)SF作家・星新一が書いた『祖父・小金井良精の記』<sup>(22)</sup>を読んでいて初めて知った。まず、この本から引用することにする。

星は小金井良精が昭和15年、朝日新聞に『東大医科の前身』と題して学生時代の思い出を書いていることを紹介した上で、そこから「抜き書き」をしている(「僕」は小金井)。

〈僕が医学をおさめたのは、明治五年の秋から、明治一三年の春の卒業までのあいだである。(略) 秋に入学したのだが、改暦の年で、たちまち正月になった。

校舎といっても、旧藤堂家の屋敷をそのまま用いているので、すべて板敷、寄宿舎はその長屋で、そこには畳が敷かれ、学生たちは好きなところに机をおき、ランプの光で勉強した。(略) 僕のような子供もいれば、すでに子のある成人の生徒もいて、まちまち。制服があるわけでもなし、思い思いの服装をしていた。(略) 数学、物理、化学など、授業はすべてドイツ語だった。(略)

ドイツ人の教師の勢力はすばらしく、ことに教頭のミュルレルは、実力は学校長以上、それどころか文部卿に対し、なにごと意見ののべ、思うようにやっていた。したがって、どの教師もミュルレルを恐れていた。〉

〈当時の友人で、医学畑以外に進んだ、思い出の二人がある。のちに貴族院書記官長になった中根重一と、内閣統計局長になった花房直三郎である。ともに藤堂長屋で同じ飯を食べた仲間。

年をとった者のなかには、酒を飲んだり、放蕩をする者もいたので、この二人などと僕ら同級は「われわれは学生として、みずからをつつしみ、大いに勉強しよう」と盟約を結び、各人が記名、血判をしたことがある。その結果、僕らの級の者は、すべて学業はもとより、品行方正を方針として進んできた。〉

当時の朝日新聞に当たってみると、中根の出てくる部分は、昭和15(1940)年1月19日の「東大医科の前身」第三回目(最終回)の後半部にある。この後に次のように続けて、小金井は回想を締めくくっている。

〈この二人もその首謀者格で医者になるのを嫌って官途についたのであるが、当時のその血判帳は今何処にあるのであろうか。(終)〉

この回想のおかげで、中根重一は明治5年秋から「第一大学区医学校」の予科4級に入り、小金井良精・緒方正規と同級であったことが分かる。清水郁太郎は、たぶん緒方より前から「春風社」でドイツ語を磨いていたおかげで成績優秀のため予科2級に転入できたらしく、中根たちの一学年上であった。

小金井・緒方・清水の3名は、いずれも東京大学(明10、改称)卒業後にドイツ留学(小金井・緒方は明治13年、清水は12年)。帰国後は東京大学の教授となった。専門はそれぞれ、解剖学・衛生学・婦人科学である。ただし残念なことに、清水郁太郎は明治16年に帰国、17年には日本人で初の東大医学部教授(産婦人科担当)となったが、翌18年、病に倒れ、2月26日に29歳の若さで亡くなっている。

清水と中根が親しくしていたかどうかは全く分からない。備後福山の「誠之館」(あるいは「同仁館」)で明治2~4年のころ同窓であったはずの二人だが、中根の方が6歳も年上で江戸帰りということもあり、見知ってはいても交際はなかったかもしれない。

中根重一は、小金井良精、緒方正規、花房直三郎のほかに、「同級生」であった浜田玄達・弘田長・石川公一・榊俣（『小金井良精日記』<sup>(23)</sup>口絵、明治13年7月の卒業写真〔卒業生17名〕のキャプションより）らと、中途退学した明治7年末か8年初頭までの2年余り、神田和泉町・藤堂屋敷の寄宿舎で寝食を共にした。医学校には北・南・東の三つの寮があり、予科の学生は北寮か南寮だった。北寮に浜田玄達と清水郁太郎が居たことが分かっている<sup>(24)</sup>。

この寄宿舎は、明治9年11月の本郷・加賀屋敷移転まで使用され、本郷には新たに木造2階建ての寄宿舎が造られた。森鷗外の『キタ・セクスアリス』（明42）には、当時の寄宿生たちにはかなり年齢差があったことが描かれている。

〈僕は寄宿舎ずまいになった。生徒は十六七位なのが極若いので、多くは二十代である。服装は殆ど皆小倉の袴に紺足袋である。袖は肩の辺までたくし上げていないと、懦弱だといわれる。〉

主人公の金井は、この学校（「東京英語学校」としてある）に「十三才」で入って、性暴力の危険に曝される。「寄宿舎は長屋造である」とあるので、入学当時の寄宿舎は明らかに旧藤堂屋敷がモデルである。小金井の回想にあった、外で女色にふける軟派の「放蕩者」ばかりではなく、内で男色を漁る硬派が多かったことも分かる小説である。中根たちが血判を押しまで「品行方正」を誓う必要があった理由がよく分かる。

ここで明治5年末までの東京大学医学部の歴史を整理しておく<sup>(25)</sup>。

明治政府は徳川幕府の医学所・種痘所などを明治元年（1868年）に医学校とし、本校を神田和泉町旧藤堂藩邸に置いた。そして2年1月、佐賀藩士・相良知安と福井藩士・岩佐純を医学取調御用掛とした。この両名が日本の医学を蘭学・英学からドイツ医学に切り替えるように画策し、フルベッキの賛同もあり、3年2月、政府は在日ドイツ公使にドイツ人医学教師の招聘を依頼した。

しかし普仏戦争（1870年7月～1871年5月）のためにドイツ人教師の来日が遅れ、その間をボードウィンで埋めたのち、明治4（1871）年8月、ようやくミュルレルとホフマンが来日した。ミュルレルらはさっそく授業を開始したが、日本の医学と医学教育の遅れを痛感し、徹底した改革を文部省（7月に創立、大学東校は東校に改称）に提言した。

明治4年12月、ミュルレルは在学学生を試験で選抜し直し、最終的には本科50名、予科63名、外員（変則）96名の学生を合格とした<sup>(26)</sup>。そして5年7月、東校（8月、学制発布により医学校に改称）の規則を再変更し、修業年限を本科5年・予科2年とし、入学は9月の年一回、入学年齢を14歳以上19歳までとした。中根はこの時22歳だったので、年齢を詐称したと思われる。森鷗外や北里柴三郎がそうしたように、戸籍ができる以前の生れの者にはよくあることであった。

初の一括入学試験はおそらく10月に実施され、南校からの転入生を含め最終的に本科生40名・予科生60名が合格した。新学期は11月から開始されたい。そして小金井の回想にあった通り、明治5年は太陽暦への改暦の年で、12月3日からもう明治6年1月1日になっている。

この時点での医学校教授陣は、外国人教師がミュルレル、ホフマン、シモンズ、ワグネル(3月に南校から移籍)、日本人教師では、10月から校長が相良知安、校長心得が長谷川泰になり、司馬凌海、三宅秀らが通訳、桐原真節、足立寛らが補習授業を行なった(入澤達吉「レオポルド・ミュルレル 本邦医育制度の創定者」<sup>(27)</sup>)。

ミュルレル(Leopold Müller, 1824-1893. 1871-1875 在任)は、帰国後の1888年にドイツ雑誌に「Tokio-Igaku」を発表した(石橋長英ほか訳『東京-医学』[1975])。そこではまず、着任当初の医学校と付属病院(旧藤堂屋敷内)の施設・環境の劣悪さが述べられている。

〈病院の場合、狭い部屋に大勢の人間が同居することになるので、この環境はさらに悪くなった。というのは、病人が入院する段になると、看護が行届かないために、本人だけでなくつねにその身寄りの者が従って来て、同じ部屋に寝泊りし、着る物や寝床を持ち込み、部屋で火鉢を用いて煮炊きし、部屋の空気を著しく汚すことになるからである。(略)

最初の年は、冬中ストーブなし、室内温度は摂氏八度か十度、われわれは暖かく着込み、われわれの近くに置かれた二個の火鉢だけで暖をとり、建付けの悪い戸や床板から遠慮なく吹き込んでくる隙間風の寒さを防ぎながら授業を行なった。〉

〈授業自体は、次のように行なわれた。私は授業に付添う通訳によって、ドイツ語か英語で講義を行なう。講義の際、私はすべての名称や表現をローマ字で黒板に書いた。講義は、通訳によって一節毎に訳され、通訳が十分に解ったと思われた段階で、私は通訳に私の講義原稿を渡し、さらに後刻それを補習教師に与えた。この講義原稿は、私が教えていた全科目にわたって続けられ、最後に完全入門書の体裁に纏められ、日本語に翻訳されて、まず生徒の手で筆記され、後に印刷に付され〉た。

ミュルレルはホフマンとともに教頭となり、学校側からの制限を受けずに「授業の編成や運営、生徒の受入れなどに関する一切について、絶対的の決定権を有し」ていた。

吉良枝郎『明治期におけるドイツ医学の受容と普及』に、明治6、7年度の「予科、本科各学年の生徒数及び学課」が文部省の年報をもとにした表として掲載されている。それによると、6年度(5年冬~6年冬)は、本科(5年)・予科(2年)ともに各学年が2級ずつに分かれており、予科は一年生が4級、3級、二年生が2級、1級と半年ごとに進級していく

システムであった。しかしこの年度は、二年生 54 人がすべて 1 級であるのに、一年生は 3 級が 57 人、4 級が 46 人となっている。つまり 4 級の学生は留級であったのだろう。

明治 7 年度になると「級」ではなく「等」が使用され、予科一年生は 2 等、二年生は 1 等と呼ばれている。そして 7 年度夏期の予科 1 等の人数は 54 人。つまりこの時点で 49 名が脱落していたことになる。清水のいる一学年上の本科 2 等は 33 人で、21 名の脱落。

中根が中退したあとの 8 年度からは予科が三年制になり、また「級」に戻った。翌 9 年度夏期の本科二年生 7 級は 26 人（1 年半で 28 名脱落）。三年生 5 級は 22 人（11 名脱落）である。

「学課」について見ると、6 年度の予科 3 級と 1 級は全く同じ内容で、「独乙学 羅句学 代数学 幾何学 物理学 化学 植物学 動物学 鉱物学」である。しかし、7 年度の予科 1 等は、「独逸学 羅句学 理化学 博物学 代数学 幾何学」と変わりが無いが、本科 2 等の方は専門的な「解剖学」「人身窮理学」「顕微鏡用法論」などが入っている。

つまり、中根が在籍していたと考えられる 6 年度・7 年度の予科のカリキュラムは、まだ「医学」とも言えない理系の基礎科目と語学であったことが分かる。

しかしミュルレルは、「医学」の基礎科目をふくめた授業内容を、系統立てたカリキュラムをもとに、日本人学生にドイツ語・英語で徹底的にたたき込むことに情熱を燃やしていた。

〈いくらか系統立て有機的に編成した授業を進めるべく、ドクトル・ホフマンと私は事前によく打合せを行ない、かれが内科を、そして私が外科、眼科、産科を受け持つこと、われわれが共同で予科的な一般教養学の講義をすること、その場合にもその講義をわれわれの専門分野にとって特に重要性を占める学問に絞ること〉などで協力し合った。

中根が少しのちに新潟医学校で、外国人教師のドイツ語通訳をしながら、ドイツ語や一部の医学科目の授業ができたのも、この官立医学校（明治 7 年 5 月、東京医学校に改称）での鍛錬と精進のおかげであったろう。そして中根は医学校を、「医者」になるための場ではなく、ドイツ語を修練するための場として捉えていたに違いない。

中根重一を 65 年もあとで〈思い出の友〉として語った小金井良精について見ておこう。

小金井良精（1859-1944）は、安政 5 年 12 月（1859 年 1 月）生れで中根とは 8 歳も年下である。のちの義弟・鷗外森林太郎の三つ上だが、鷗外の公称年齢とは一つしか違わない。

越後・長岡藩士（牧野氏）の家に生れ、母方の伯父に『米百俵』の主役・小林虎三郎がいる。戊辰戦争の主役のひとり河井継之助とも親類にあたり、星新一『祖父・小金井良精の記』の冒頭にはこの因縁の二人が描かれている。

明治 2（1869）年、11 歳で養子に入り、秋田栄雄を名乗る。3 年 7 月、秋田家と共に上京。10 月、大学南校に入るが、5 年に退校処分を受けた。その年の医学校入学について、『祖父』

に引用されている良精の記録には次のようにある。

〈十月、叔父、小林雄七郎の助力により、将来の方針をさだめ、医学をこころぎす。第一大学区医学校に入学し、かつ入舎せしは、これ十一月七日。良精、満一三歳一カ月なりき。〉

この2日あと明治5年11月9日に布告があり、改暦して12月3日を6年1月1日とする  
とされた。旧暦の明治5年11月7日は西暦では12月7日に当たり、先の回想にあった「秋」  
ではなく、実は「冬」の入学であった。また、小金井は正式な入学試験を受けず、小林虎三  
郎が同郷の長谷川泰に頼んで入れてもらったように『祖父』では書かれている。

明治6年12月に「官費生」となり、7年に、「十一月、大試験に及第、本科に入る」。本  
科ではデーニッツにつき「解剖学をはじめる」と『祖父』の記録にある。

そして8年の春、「故あって実家に戻」り、以後、小金井良精を名乗る。とすると、中根  
と同舎していた頃はずっと秋田栄雄だったことになる。

明治9年に東京医学校の校地が本郷に移転、ベルツが着任。10年、東京大学医学部創立。  
13年3月の卒業試験に首席で合格し、7月に医学部を卒業。学士となる。緒方正規とともに  
文部省派遣の官費留学生に選ばれ、11月にドイツへ向かった。12月30日、ベルリン到着。  
先輩の梅錦之丞、そして清水郁太郎の世話になる。

明治18(1885)年6月に帰朝、9月から東京大学に出講。最初の結婚。19年に教授(解  
剖学担当)。この年、妻を亡くし、21年5月に森喜美子と再婚。6月、30歳で医学博士。た  
だし、小金井の専門はこの当時からアイヌ研究を始めとする「人類学」に傾斜していき、現  
在では医学者としてよりも「人類学者」として著名である。

こうした経歴を見ると申し分のない学者人生に思えるが、小金井は身体が弱く、留学中か  
ら慢性病に悩まされていた。喜美子との縁談のときも、自分のように病弱な男の所に来てく  
れる人はあるまいと言っていたという(小金井喜美子『鷗外の思い出』)。それが満85歳ま  
で長生きしたのだから、人生は分からない。

小金井が亡くなって(1944年10月16日)、戦後、生誕百年を記念して『日本医事新報』  
(1806号、昭33年12月)で「小金井良精先生を偲ぶ」という特集が組まれた。その中に緒  
方富雄が、ある物を自分が保管していると言う箇所がある。

〈それは小金井先生が東京医学校にお入りになつて寄宿舎に入つていられた時代の門鑑  
ですが、こういう木製の、片側に、「東京医学校」という焼印がおしてあり、他側に  
「第三百三十五番小金井良精」と書いてあります。〉

その前の寄宿舎仲間のひとりが中根重一であるが、彼の東京医学校中退の真相については

何も分かっていない。ただし小金井のおかげで、中根が医学校在学中から「医者」を嫌っていたことが分かったのと、小金井同様に品行方正・勤勉であったので落第して退学したのではないだろう、という推測は立つ。少なくともドイツ語が堪能であったことは、少しのちに外国人医学教師のドイツ語通訳に推挙されたことでも分かる。

しかしなぜ中根は、中退後の明治8(1875)年3月、「東京書籍館」(のちの帝国図書館、現在の国会図書館の前身)に職を得たのかが分からない。調べてみると、当時の東京書籍館は決して良い職場だとは言えないところであった。

#### (4) 湯島聖堂：東京書籍館

「書籍館」<sup>しょじやくかん</sup>とは、つまり図書館である。明治初年頃の図書館は、「博物館」の付属物のように見なされていて、また、太政官・大蔵省・司法省などの各官庁や「大学」(南校・東校)は、それぞれの蔵書を持ち、数も質も「書籍館」より優れていた<sup>(28)</sup>。

しかし書籍館＝図書館の使命は、一般公開性にある。江戸時代まで一部の上層階級や学者に独占されていた「書籍」は、公共機関によって民間人に開放されるべきである、という発想は実に近代的なものである。「四民平等」を謳い、また国際競争力を高めるためにも啓蒙教育を推進した明治政府は、当然「博物館」・「書籍館」の充実を図らねばならなかった。

明治4(1871)年7月に、学術・教育を担当する官庁として、神田の湯島聖堂内(昌平坂学問所跡)の旧「大学」に文部省が設置され、明治5年4月、旧大学の講堂に「書籍館」が創設された(8月から一般公開)。『文部省第一年報』には、「文化進歩ノ為メ此館ヲ置キ群書ヲ蒐集シ、普ク人民ノ閲覧ヲ許ス」とある。

しかし、明治6(1873)年3月、「書籍館」は太政官に設けられたウィーン万国博覧会(1873年5月～10月)の準備委員会に召し上げられてしまう。

この博覧会事務局への強制合併によって「書籍館」の機能が停止していたのかどうかは「これを瞭らかにするを得ない」と、竹林熊彦『近世日本文庫史』(昭18)は書いているので、元のまま湯島聖堂・大成殿で開館していた可能性もあるようだ。

明治7年7月、その大成殿を政府は、板垣退助らの「民撰議院設立建白書」に応じて開こうとした「地方官会議」の会場にしようと考え、博物館の所蔵物や書籍館の蔵書を浅草の米倉の敷地に移し、そこに官立「浅草文庫」が開設された。しかし、その会議自体が流れてしまい、それでようやく明治8(1875)年2月、大成殿は文部省管轄に戻された。しかし、「浅草文庫」に移した書籍は戻されず、文部省は一から書籍や資料を集めなければならなかった<sup>(29)</sup>。

『近世日本文庫史』は「東京書籍館」の開館について、明治8年3月13日、「文部省は新に博物書籍両館を設け、神田宮本町八番地旧昌平校内大成殿をもつて仮りにこれに充当し、中督学畠山義成に両館長を兼ねしめた」(図C [大成殿] 参照)と書いて、「明治九年三月東京書籍館長補永井久一郎より文部大輔田中不二麻呂に提出せる年報」を引用している。

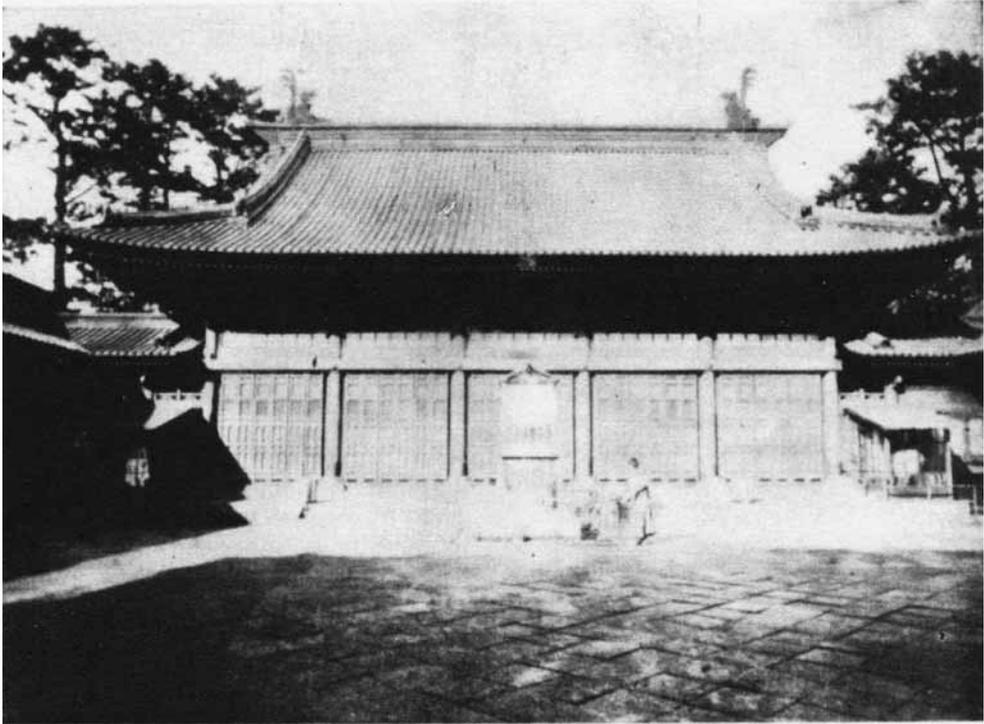


図 C

〈○四月八日東京書籍館ト改称ス○五月十四日館務ヤヤ整頓スルヲ以テ乃チ規則ヲ定メ、始テ館ヲ開テ内外人の覧閲ヲ許ス。(略) ○初テ館ヲ開テ覧閲ヲ縦スニ当リ、正殿ノ中央ヲ展覧ノ処トシテ、書函ヲ東北ノ両側ニ排列シ、杏壇門ヲ以テ覧閲者昇降ノ処トス〉

この当時、文部卿は空席で、文部大輔の田中不二麿が文部省のトップであった（明7年5月～11年5月の期間）。書籍館の文部省への返還は、田中不二麿らによる粘り強い運動の結果であり、その間の事情について石山洋は、「不二麻呂は彼に好意的な長州閥の巨頭参議木戸孝允に文部卿就任を依頼し、木戸文部卿の圧力で合併取消を勝ち取る。ただし名義と湯島聖堂及び小石川薬園を取戻したに止まり、博覧会事務局に渡った資料は書籍も戻らなかった。」と書いている<sup>(30)</sup>。これが本当なら、木戸の文部卿時代（明治7年1月～5月）に合併取消が決まっていたのだが、大成殿の「地方官会議」利用計画のために延期されていたことになる。

田中不二麿は、畠山義成を博物館兼任で書籍館長とし、両館の「館長補」に永井久一郎をあてた（書籍館の方は永井が取り仕切っていたと思われる）。山田久「書籍館への情熱——田中不二麿と永井久一郎」<sup>(31)</sup>によると、これには明治6年6月に来日した文部省お雇い外国人マレー（モルレー）の影響があるという。マレーは日本人留学生が数多く在籍したアメリカ・ラトガース大学の教授で、畠山も永井も彼の教え子だった。

永井久一郎（1852-1913）は、田中と同じ尾張藩出身で、のちに日本郵船の重役、また著

名な漢詩人ともなるが、小説家・永井荷風の父親として有名である。明治8年の頃は、アメリカ留学（明4～6）から帰国してまだ間もなく、年齢も24歳だった。中根重一の一つ下である。

永井の書籍館における「実績」について、山田久は次の5点を挙げている。

- ① 無料公開制 —明治5年の創設時は有料だった。
- ② 夜間開館の実施 —閲覧者の数が予想以上に増えたため、明治9年7月から、開館時間を夜10時までとした。短い期間で終わったが画期的だった。
- ③ 館外貸出を提案 —複本のみとしたが、これは文部省の許可が出なかった。
- ④ 納本制度の確立 —明治8年6月、出版許可の業務が内務省に移された際、一時的に書籍館に「納本」されなくなり、交渉の末、内務省への納本の一部を書籍館に納めさせるようにした（7月）。
- ⑤ 法律書庫の設置 —開成学校内に、一時期「法律書庫」を設置し部門別化を図った。

中根重一は、開館当時の明治8年3月に「東京書籍館並博物館<sup>やとい</sup> 雇」となり、「東京書籍館」の廃止が決まった10年1月まで勤めているので、奉職中はずっと永井に仕えていたことになる。また、この間に結婚したらしく、10年7月に長女・鏡子が生れている。

「東京書籍館」の概要が分かる統計的数字は、明治8年度・9年度の永井久一郎の報告によると以下ようになる。

#### 【書籍数・新聞雑誌の種類】

- ・8年度 所蔵書籍 32,907冊, 新聞雑報 74種
- ・9年度 74,662冊,

#### 【書籍の種類】

	和漢書	英書	仏書	独逸書	魯書	イタリー	イスパニア	オランダ書
・8年度	25,098冊	4,434	1,023	655	28	16	36	51
・9年度	47,813	5,399	1,263	910	62	17	36	6,547

新刊 12,615冊

#### 【閲覧者数】

- ・8年度 総数 5,247人（開館日数 217日）
- ・9年度 総数 24,468人（開館日数 339日）

明治8（1875）年度よりも翌9年度の方が、書籍数・閲覧者数ともに格段に伸びていることが分かる。

また、この年次報告には、書籍館のスタッフ数も記載されているが、

- ・ 8年度職員 館長1人 館長補1人 書記7人 諸雇3人 計12人
  - ・ 9年度職員 館長補1人 監事1人 諸雇22人 計24人
- となっている。

中根重一は、明治8年度の「諸雇3人」のうちの1人だったと思われる。彼に与えられた仕事はおそらく、洋書や医学書の受入れ・整理、特にドイツ書の担当であっただろう。そうでなければ二年間だけとはいえ、東京医学校予科で医学・理化学用語を中心にドイツ語を鍛え上げた中根がこの職に就こうとは思わなかったはずだ。

たとえば8年度報告の「書籍納付人名帳」の中に、「愛知県士族柴田承桂より英書五冊、仏書一六冊、独逸書一五四冊」とあるが、このドイツ書のほとんどは理化学書だったはずであり、中根が整理を担当したであろう。柴田承桂（1850-1910）は、尾張藩医の家に生れ、明治2年に大学東校に入学、4年にドイツ留学、化学・薬学・衛生学を修め、7年に帰国して、東京医学校の初代製薬学科教授に就任している。また、文部省が編纂した『百科全書』（明9～16）の「地質学」「果園篇」「太古史」「古物学篇」の翻訳も担当している。

この『百科全書』には、福山「誠之館」教授だった小林義直も「氣中現象学篇」「蒸気篇」「食物製方」の担当をしている。「東京書籍館」は文部省所管で、中根重一がその「雇」となるにあたっては、東京医学校あるいは文部省で中根をよく知っている人物が関係していると考えられる。小林は明治2年12月から4年9月まで大学東校の教師を勤め、4年9月から8年1月まで文部省に出仕して、特に6年5月からは「翻訳課に属して医書編纂専務」だった<sup>(32)</sup>ので、文部省が取り戻した「書籍館」の雇用情報を中根に伝えていてもおかしくはない。

事実、「東京書籍館」がドイツ語の出来る人間を求めていることは、明治8年6月8日の『郵便報知新聞』に、「神田宮本町八番地東京書籍館へ尋常の独乙文を綴り得て、傍ら少しく仏文又は英文を解し候者試験の上雇入るべし」という広告を出していることでも分かる<sup>(33)</sup>。さらに翌9年6月24日の『東京日日新聞』にも、「当館ニ於テ少ク英語学ニ通ズル者一名、試験ノ上月給凡<sup>およそ</sup>金拾五円ヲ以テ雇入ルベシ、望ノ者ハ来ル二十七日午前第九時出頭スベシ」という記事を出しているので、洋書の整理用員は慢性的に足りなかったと思われる。

明治9（1876）年頃の一円の価値は、ごく大雑把に言って、今の1万円～2万円の間だろう。たぶん当時の十五円は今の20数万円くらいで、あまり高給とは言えない。しかし、普通の事務・雑務の「雇」よりは厚遇されていたようだ。

8年3月の開館当時から「東京書籍館雇」となった中根重一の月給は、もう少し高額であっただろう。それで明治9年に結婚し、その前後に備後福山から両親を呼び寄せたのではないかとと思われる。少なくとも10年7月に長女・鏡子が生れたときには両親と同居していたはずだ。でなければ、身重の妻を残して、6月に新潟へ単身赴任はしないと思われる。

あるいは、いよいよ福山での生活に行き詰った両親から早く上京させてくれと懇願され、医学校を辞めて早く職に就こうと思っていたときに話があったのが「東京書籍館」だった、

とも想像できる。そしてラブロマンスの結果というよりも、父母の面倒を見てくれる人という条件で結婚したのではないか、とも考えられる。

どちらにせよ、「雇」の身分は「出仕」とはまるで違う。書籍館職員には、8年度は「書記」がいたのに、9年度には「雇」しか居なくなっている。確かに職員の数は24人になり2倍に増えたが、「館長」がスタッフ名簿から外れていて、「雇」の上の役職がないということは、この職場は〈出世〉に縁がないことを意味する。

中根重一は、洋書の鑑定・整理という特殊作業ゆえに、「雇」にしては良い給料を得ていた可能性がある。また、その仕事は自分の語学や学問にも役立つものであったし、湯島聖堂の「書籍館」は神田和泉町の旧藤堂屋敷から距離が近かったのでよく通っていて、愛着があったのかもしれない。それで国元から両親を呼び寄せ、身を固めてここに落ちつこうとしたとも考えられるが、もしそうならば大きな見込み違いとなってしまった。

『近世文庫史』は、明治10年初頭に突然決まった「東京書籍館」廃止を次のように書いている。

〈かくして創業の熱意に燃え、内外の視聴と歓呼のうちに発足した文部省の東京書籍館は、当事者の期待し希望せし如く。翌明治九年には蔵書の増加、印刷目録の刊行、納本の一部取得、法律書庫の開始、夜間開場等矢継ぎ早やの活動を試み、前途洋々たるものがあつた。しかるに明治十年に至り西南の風雲いよいよ急に、中央政府の経費節約を要するものあり、二月四日を以て東京書籍館は廃止と決し、十五日を限り閉鎖すべき命を受けた。〉

西南戦争の端緒となった「弾薬掠奪事件」は1月29日に起きているので、この前後から明治政府は臨戦態勢を敷くと同時に、あらゆる部署の経費節減を行ない、そのとぼっちりが「東京書籍館」に回ってきたのだ。ほとんどの職員は中根と同じように1月には解雇されたと考えられる。

しかし、一旦は廃止と決まったものの、ちょうどそのころ東京府が「書籍館」を設けることを検討中で、永井久一郎は「東京書籍館」の府への移管を推進させ、文部省も一部の教育・法律関係の書籍を除いた全面移管を決定し、5月4日に引き渡しを完了した。永井は3月27日付で東京女子師範学校への転任が決まったが、それまでは移管に伴う残務に没頭した。

さて、その後の中根重一は、新潟病院とその付属学校が新たに雇い入れたオランダ人教師・フォックのドイツ語通訳を探していたのにうまく適合し、明治10年6月に単身赴任した。

これが彼の希望通りのリクルートであったのかどうかは分からない。月給五十円の報酬には満足したかもしれないが、この頃からすでにドイツ語能力・翻訳能力を生かして官界での地位を望んでいた可能性が高い。そして4年後の明治14年に中根は、定職の宛てもなく再上京し、とりあえず「翻訳」で糊口をしのぐことになる。『漱石の思い出』で鏡子が4、5歳

のころ、祖父・忠治が内職をしていたのはこの重一の浪人時代のことだろう。

最後に、小金井良精が〈思い出の二人〉に挙げたもう一人、花房直三郎と中根重一の関係について記しておく。

花房直三郎（1857-1921）は、安政4年、岡山藩士の家に生れた。中根より6歳年下である。東京医学校をいつ頃やめたのか分からないが、直三郎の兄・花房義質（1842-1917）は著名な外交官であった（1880年、初代朝鮮公使、1883年、在露特命全権公使）ので、仕官は容易であっただろう。はじめ太政官御用掛となりドイツ語通訳や翻訳の仕事をしていたと思われる。

実はこの時代に花房直三郎と中根重一が〈共訳〉を果たしていたことが、調べていて分かった。国会図書館の「近代デジタルライブラリー」で「中根重一」を検索すると、一冊だけ出版年次不明の図書が出てくる。『貴族特権』という本で、「中根重一／等編訳」となっているが、それは中根が最初の文章を訳しているからで、後の方は「花房直三郎・訳」あるいは「校閲」の訳文の方が多い。

また、『貴族特権』の中には、お雇いドイツ人学者ヘルマン・ロエスレル（1834-1894, Hermann Roesler. 1878-1893 在日）との「答議」がいくつか記載されているが、その中の、中根の訳した「答議」の一つには「千八百八十三年三月十六日」という日付がある。

中根重一は明治15（1882）年3月に太政官御用掛となり、18年8月に外務省翻訳局に転じた。一方、花房直三郎は明治17年3月24日に「太政官御用掛」から「外務省准奏任御用掛」となっている<sup>(34)</sup>ので、この共訳書の刊行は16年4月から17年3月の間の可能性が高い。内容も、華族令（明治17年7月制定）のための参考資料だと考えられる。

つまり、中根重一と花房直三郎は、15年3月からの2年間、同僚であった可能性が高い。花房のほうが先輩であっただろうから、中根が浪人時代を脱して太政官に仕官できたのには、花房直三郎の助力もあったのかもしれない。

最後に改めて、夏目漱石と中根重一とを比べてみると、処世術や人間観において反りが合わなかった二人ではあるが、若いころは何の後ろ盾もない中で、学歴と語学力だけで世の中を渡っていった所がほとんどソックリに見える。違うのは、中根の方は海外留学の機会を逸してしまっていることだ。

本研究の(2)以降で詳しく述べるつもりだが、漱石の岳父・中根重一の人生は、晩年こそ悲境に沈んだものの、留学経験がないハンデを乗り越え、得意なドイツ語を駆使して、医学・法学・政治経済の世界を縦横に渡り歩いた人生だったとも言えそうだ。

（2017年11月6日 稿）

## 《注》

- (1) 松岡譲編『漱石写真帖』(1929 第一書房)。
- (2) 『貴族院要覧』(1898・3月編 貴族院事務局)。
- (3) 平成版『漱石全集』別巻(1996 岩波書店)。
- (4) 橋川俊樹『『道草』——冬への収斂——(及び岳父・中根重一の「悲境」について)』(1986・11月 『稿本近代文学』[筑波大学平岡研究室]第9集)を参照のこと。
- (5) 『漱石の思い出』文春文庫版(1994)より。
- (6) 宮居康太郎『新聞界人物評伝』(1929 新聞興信所)。
- (7) 入澤達吉『思出の記』(1932 自家版)。
- (8) 『誠之館百三十年史』(1988), 『福山市史』(1963)等より。
- (9) 『福山藩・明治維新への胎動』(2017 福山城博物館。9月16日～11月12日展示ガイド)。
- (10) 『誠之館百三十年史』(1988 誠之館百三十年史編纂委員会編)。
- (11) 『誠之館百三十年史』, 清水久人『福山藩の教育と沿革史』(1999 阿部正弘公顕彰会)。
- (12) 『広島県史 近世1』(1981 広島県)。水野家から幕府へ福山城受け渡しするとき, 名が出る。
- (13) 風間誠『藩士・風間家の研究: 福山藩(江戸定府)藩主譜代大名・阿部公御代御仕え江戸時代から明治時代への変遷』(2017 本の森 [発売])。
- (14) 土井作治『幕藩制国家の展開: 広島藩・福山藩を中心として』(1985 溪水社)。
- (15) 唐沢富太郎『貢進生: 幕末維新期のエリート』(1974 きょうせい)。
- (16) 石黒忠恵『懐旧九十年』(1936 博文館)。岩波文庫版より。
- (17) 野村茂『北里柴三郎と緒方正規: 日本近代医学の黎明期』(2003 熊本日日新聞社)。
- (18) 上村直己『緒方正規のドイツ留学とベッテンコーファー宛書簡』(2005・3月『文学部論叢』[熊本大学文学部])。
- (19) 『誠之館百三十年史』ほか。
- (20) 山本修之助『司馬凌海』(1967 司馬凌海先生顕彰会)。
- (21) 川俣昭男『明治初期東京大学医学生 川俣四男也——その学生生活を中心に』(2005・3月『東京大学史紀要』23号)。
- (22) 星新一『祖父・小金井良精の記』(1974 河出書房新社)。河出文庫版(2004)より。
- (23) 『小金井良精日記 明治編 1883-1899』(2016 クレス出版)。
- (24) 吉良枝郎『明治期におけるドイツ医学の受容と普及: 東京大学医学部外史』(2010 築地書館)。
- (25) 『東京帝国大学五十年史』(1932), 『東京大学百年史 通史一』(1984)ほか。
- (26) 注(24)に同じ。
- (27) 『入澤達吉』(1965 入澤達吉先生生誕百年記念会)所収。
- (28) 橋川俊樹『漱石と図書館: 野心と孤独』(2016・7月 『文學藝術』[共立女子大学文芸学部])。
- (29) 石山洋『源流から辿る近代図書館: 日本図書館史話』(2015 日外アソシエーツ)。
- (30) 注(29)に同じ。
- (31) 山田久『書籍館への情熱——田中不二麿と永井久一郎』(2000・2月 『中部図書館学会誌』)。
- (32) HP「福山誠之館同窓会」の「誠之館人物誌」より。  
(<http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/jinbutsushi-idx/jinbutsushi-idx.htm>)
- (33) 竹林熊彦『近世日本文庫史』(1943 大雅堂)。
- (34) 「国立公文書館デジタルアーカイブ」より。

A Study of Shigekazu Nakane—  
Soseki Natsume's stepfather (1):  
Seishikan in Fukuyama-han, National Medical School,  
Tokyo Shojakukan

Toshiki Hashikawa

This is the essay about Soseki Natsume's stepfather, Shigekazu Nakane. In December 1895, Soseki—his real name was Kin-nosuke Natsume—met Kyoko Nakane in an arranged marriage meeting at the official residence of the Chief Secretary of the House of Peers in Uchisaiwaicho, Tokyo. Her father Shigekazu had held position of Chief Secretary of the House of Peers since February the previous year. He was at the height of his career.

As Soseki described in “*Michikusa*” (1915), when He returned from England in 1903, Nakane was extremely impoverished and could not afford even an overcoat. He had no work and had heavy debts from a big loss which he had suffered on the stock market.

Soseki had a bad relationship with his stepfather. He did not even attend his funeral when he died in 1906. But Soseki was more or less under the influence of Nakane.

Basic information on Nakane “*Soseki no Omoide* (The memory of Soseki)” which was dictated by Kyoko Natsume and written by Yuzuru Matsuoka, but it does not tell much about him. This essay made a thorough investigation about him.

In 1851, Nakane was born at the *edo-hantei* (residence maintained by a daimyo in Edo) of *Fukuyama-han* at Nishikata-machi, Tokyo. At the time of the Meiji restoration (1868), his family moved to Fukuyama in Hiroshima Pref.. Fukuyama-han ran schools named *Seishikan* in both Edo and Fukuyama. This essay reports the education Nakane received at both schools.

Second, Nakane enrolled in the *Igakko* (now the University of Tokyo Faculty of Medicine.). However, his purpose was not to be a doctor but to study German. This essay describes about the medical education and German language education at the school, and his life in the dormitory.

Finally, Nakane left the *Igakko* after two years and worked for *Tokyo Shojakukan* (now the National Diet Library) from 1875 to 1877. The essay conjectures about Nakane's work here.

Investigating Nakane's life provides meaningful study of a man who lived in the Meiji era.